

豊福知徳 略歴

作成にあたり、「豊福知徳展」(展覧会パンフレット、太宰府館まほろばホール、2004-05)の年譜等を参照した。

- 1925 福岡県三井郡山川村(現・久留米市)に生まれる。6人兄弟の三男。
- 1942 國學院大學予科に入学。
- 1944 在学中に陸軍に志願。陸軍特別操縦見習士官となる。
- 1945 敗戦。大学には戻らず、郷里・久留米に帰る。
- 1946 福岡県太宰府で活動する木彫家・富永朝堂に師事し、彫刻を学ぶ。
- 1947 福岡市の画家・山田栄二のデッサン教室に通い、デッサンの勉強をする。ここで和子夫人と出会う。西部美術展に《女のトルソ》を出品。
- 1950 「第14回新制作派協会展」にて《男のトルソ》が初入選。
- 1952 東京・三鷹にアトリエを構える。
- 1956 「第20回新制作協会展」で《黄驥》が新制作協会賞を受賞。
- 1957 新制作協会会員となる。
- 1959 《漂流'58》で第2回高村光太郎賞受賞
- 1960 東京画廊で初個展。「第30回ヴェネツィア・ビエンナーレ」に日本代表の1人として出品。イタリア・ミラノに移住。
- 1964 「カーネギー国際美術展」(米国)に出品。「第32回ヴェネツィア・ビエンナーレ」に日本代表の1人として出品。
- 1965 「第8回サンパウロ・ビエンナーレ」、「新しい日本の絵画と彫刻」(サンフランシスコ美術館ほか全米7会場)出品。
- 1967 「パドヴァ国際彫刻コンペティション」で2等賞。
- 1969 「第1回現代国際彫刻展」に《風I》を出品。9年ぶりに帰国。
- 1970 「万国博美術展」(大阪)に出品。
- 1974 ミラノと東京で個展。
- 1978 北九州市立美術館で「豊福知徳展」開催。第10回日本芸術大賞受賞。
- 1979 九州産業大学大学院の得遇教授となる。
- 1982 個展(天画廊、福岡市)
- 1983 久留米市の久留米中央公園に《石声庭》完成(翌年、第9回吉田五十八賞受賞)。
- 1990 第31回毎日芸術賞受賞。
- 1993 紫綬褒章受章。
- 1994 三鷹市美術ギャラリーにて個展「豊福知徳展～具象と抽象のはざまで～」。
- 1995 第20回福岡市文化賞受賞。
- 1996 福岡市・博多港中央ふ頭にモニュメント《那の津往還》完成(翌年、同作品が第10回福岡市都市景観賞受賞、第8回本郷新賞受賞)。
- 2001 黙四等旭日綬受章。
- 2003 帰国。福岡市に住み太宰府市で制作。第62回西日本文化賞受賞。
- 2018 福岡市百道浜に「豊福知徳ギャラリー」オープン。
- 2019 5月18日、福岡市で死去。94歳。

菊畠茂久馬 略歴

作成にあたり、「菊畠茂久馬 戦後／絵画」(2011)所収の年譜等を参考した。

- 1935 長崎市丸尾町に生まれる(本籍は徳島県)。
- 1938-44 祖父母、父が相次いで死去。長崎市や五島の親類宅に預けられたのち、福岡市の母の元に移る。
- 1950 母、がんのため死去。
- 1953 福岡県立福岡中央高等学校卒業。
- 1956 「第24回独立美術協会展」(東京都美術館)に《二人》が入選。
- 1957 前衛美術グループ「九州派」に参加。九州派主催の展覧会に出品(1961年まで)。
- 1958 初個展(岩田屋美術画廊、福岡市)。石井温子と結婚。
- 1959 オチオサム、山内重太郎、菊畠の3人で九州派を脱退し「洞窟派」結成。
- 1960 「第12回読売アンデパンダン展」(東京都美術館)に《葬送曲No.2》他を出品。九州派に復帰。
- 1961 「現代美術の実験」(国立近代美術館、東京)に選抜出品。
- 1962 南画廊企画による東京での初個展。九州派を離脱。
- 1964 南画廊で2度目の個展。筑豊の炭坑画家・山本作兵衛を知る。
- 1965 「新しい日本の絵画と彫刻」(サンフランシスコ美術館ほか全米7会場)出品。
- 1967 「九州・現代美術の動向」(福岡県文化会館)を谷口治達、深野治と企画開催。
- 1970 美学校(東京)講師となる。2001年まで継続。
- 1978 『フジタよ眠れ—絵描きと戦争』(葦書房)、『天皇の美術』(フィルムアート社)を出版。
- 1981 菊畠が編集した山本作兵衛炭坑画集『王国と闇』(葦書房)出版。菊畠がシナリオと構成を担当したテレビ番組『絵描きと戦争』(RKB毎日放送)放映。
- 1983 「1960年代—多様化への出発ー」(東京都美術館)に出品。
- 1983 19年ぶりの本格個展(東京画廊)。《天動説》シリーズ8点を発表。
- 1986 『反芸術綺談』(海鳥社、福岡市)を出版。
- 1988 初の回顧展「菊畠茂久馬展」(北九州市立美術館)。
- 1989 第14回福岡市文化賞受賞。
- 1993 『菊畠茂久馬著作集』(海鳥社)全4巻刊行開始。
- 1996 第4回福岡県文化賞(創造部門)受賞。
- 1997 第56回西日本文化賞受賞。
- 1998 個展「菊畠茂久馬:1983-1998 天へ、海へ」(徳島県立近代美術館)。
- 2004 第3回円空賞受賞。
- 2007 個展「菊畠茂久馬と<物>語るオブジェ」(福岡県立美術館)。
- 2009 個展「菊畠茂久馬ードローイング」(長崎県美術館)。
- 2011 回顧展「菊畠茂久馬回顧展 戦後／絵画」(福岡市美術館・長崎県美術館 同時開催)。本展で第53回毎日芸術賞受賞。
- 2015 「菊畠茂久馬展『春の唄』」(カイカイキキギャラリー、東京)。
- 2016 「村上隆のスーパーフラットコレクション」(横浜美術館)、「釜山ビエンナーレ2016」(韓国)に出品。
- 2020 5月21日、福岡市で死去。85歳。

野見山暁治・豊福知徳・菊畠茂久馬 —地方と海外のはざまで—

NOMIYAMA Gyoji, TOYOFUKU Tomonori, KIKUHATA Mokuma :

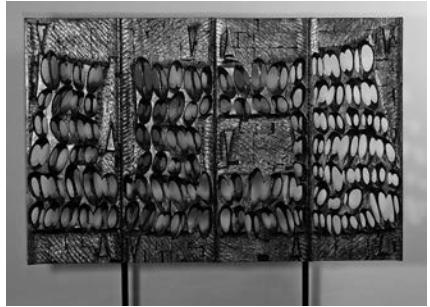
Caught Between Home and Abroad

会期 2021年5月18日(火)-8月1日(日)

会場 近現代美術室B



野見山暁治《人間》1961年



豊福知徳《空II》1965年



菊畠茂久馬《ルーレット》1964年

野見山暁治・豊福知徳・菊畠茂久馬——3人の美術家の作品を当館所蔵品および西日本シティ銀行よりの寄託作品でご紹介します。

野見山は東京、豊福はイタリア、そして菊畠は地元福岡を拠点に長年制作を続けてきました。

作風、創作態度もばらばらな3人ですが、全員福岡ゆかりであり、地元との関係を維持しながら海外での活動または海外への展覧会出品を経験してきました。

彼らの作品は、抽象形態を主体とする絵画や彫刻ですが、その作品の背後には、地方性と国際性の間での彼らの格闘の跡が埋め込まれています。

本展では、各美術家の言葉を手掛かりに、彼らの作品世界にご案内します。

(学芸員 山口洋三)



〒810-0051
福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051(代表)
FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

野見山暁治

「ある日、パリのミュゼ・ギメ（東洋美術館）で中国の古い絵の写真を見た。この世にこんな絵があったのか。おかしな話だが、自分が東洋人でありながら、生まれて初めて出会う驚き。山水図と題されているが、これを風景といおうと人間といおうと一向に構わない、自然を誠実に追いかけた筆触、ついに象徴と化した不思議。

しかしこれは異国で目覚めたばかりの体験ではないようだ。数年たつと、人は自国の文化に還ってゆくものらしい。日本から東洋画の画集を取りよせては見る滑稽さを、それから数年繰り返して、とうとう東洋の日本に僕は戻ってきた。」（「野見山暁治展【図録】」、東京国立近代美術館他、2003年より）

*野見山は東京美術学校を戦時繰り上げ卒業して従軍。中国戦線に送られるが、体調を崩し、療養中に敗戦を迎えた。画家になる夢を抱えて、戦後間もない1952年、西洋美術を実体験すべくフランス政府私費留学生として渡仏した。構築的な西洋美術の造形感覚を身に着けるべく長く格闘し、「サロン・ドートンヌ」などにも出品した。しかし在仏期間後半から次第に色と形は、目の前の対象を離れて抽象度を深めていく。アトリエの窓から見える丘陵の風景に人間像を重ね合わせた『人間』はその頃描かれた。一方で1959年頃より中国の山水画に关心を深める。西洋世界に根付けないことへの虚しさも重なり、12年間の在仏生活に終止符を打ち帰国した。帰国後は東京藝術大で教鞭をとる傍ら、東京と福岡県志摩町にアトリエを構えて制作。『説話』は、志摩のアトリエのベランダの窓が暴風雨で割れてしまったときの視覚体験がもとになっている。近年の作品はさらに自由度を増した奔放な作風へと展開。現在も旺盛に制作を続けている。

豊福知徳

「第8回サンパウロ・ビエンナーレ展に出品した1965（昭和40）年前後は、ぼくが一番多く作品を作った時期である。…次々にイメージがわき出る。“穴”的発見がきっかけでバリエーションができるといった。…日本で身につけたカスミみたいなものを捨てようと思って制作した。全く新しい世界を作り出す決意で、それができたという自負があった。

サンパウロ・ビエンナーレ展の会場に、やはり出品者として日本からきた彫刻家のK君が言った。「日本時代の仕事と少しも変わらないね。」

ショックだった。日本での自分を捨て切ったという自負心が壊された。考え込んだ末、指摘の正しさに気付いた。当然だろう。表面的には具象が抽象に変わっている。だが、20歳から15年かけて築いたものが、数年でなくなるはずがない。…

K君は、ぼくの作品の後ろの潜むものを、見抜いてくれたのだ。うれしかった。日本人として、新しい世界を切り開こうと思った。」（吉田浩『彫刻家・豊福知徳聞書 東と西のはざまで』西日本新聞社、1997年より）

*豊福は國學院大學在学中に志願して軍隊に入り、陸軍特別操縦見習士官となる。特攻を覚悟したがその前に敗戦。復学はせず、彫刻家・富永朝堂に師事して伝統的な木彫を学び、また新制作派教会展にも出品を重ねて近代美術にも親しんだ。『漂流'60 II』は、国内で高い評価を受けた『漂流』シリーズの中の1点。1960年、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本

代表に選ばれたことを契機にイタリア・ミラノに拠点を置く（2003年に帰国）。イタリアに渡ってからは、具象性を捨てて作風の転換を模索した。試行錯誤の末、丸ノミで木板を前後両方から彫り込んだ時に偶然できた「穴（穿孔）」を活かしたレリーフや彫刻を制作。『空II』は、第8回サンパウロ・ビエンナーレ出品作。後半生では、穿孔と、初期の「漂流」シリーズに見られる具象性とを融合させた彫刻を制作した。

菊畠茂久馬

「近代絵画は「虚構」の表現論をにぎりしめて、かろうじて自立の道を開いて来た。しかし近代におけるタブローの成立は、反面本番なしの作為だけの八百長の予行演習ばかりに終始し、「虚構」の表現論は今や創造自体を虚像にしてしまいつつある。

彼（編注：山本作兵衛）の画業のもつ意味は、その近代がはらみつづけてきた「虚構」の問題に対して肉迫しているのである。かのように言ってしまったからといって、彼の絵に記録性やりアリズムの問題を繼承して枝葉をのばす気持ちはさらさらない。むしろ言ってしまえば、わたしはこの絵（編注：山本作兵衛の炭鉱記録画）の中に展開されるさまざまな事象にはほとんど興味がない。興味どころかこの記録性をこそ剥奪してなお余りある絵画の存亡を賭けた「自棲」の秘術をこそ見とどけたいのである。」（菊畠茂久馬「川筋画狂人」「フジタよ眠れ—絵描きと戦争」葦書房、1978年より）

*菊畠は、幼少期に父を亡くし、戦火の福岡を母とともに生き延びたが、その母も戦後まもなく病死。孤独な中、前衛美術グループ「九州派」に所属して画家となり、アスファルトや廃材を画材として『葬送曲 No.2』などを制作した。1960年代には若手前衛作家の代表格として注目され、東京の南画廊が個展を2度企画した。その折の出品作『ルーレット』は、米国での展覧会にも出品され、コレクターが購入するほどの評価を受けていた。だが、福岡に住む菊畠はそうした東京の動きに違和感を覚えた。同時期、彼は知人の紹介で福岡県筑豊の炭坑画家・山本作兵衛を知り、その作品に衝撃を受けた。また1970年に米国から「無期限貸与」として返還された戦争記録画についての研究も開始。近代美術史から排除されていった作兵衛作品、戦争画を通して、近代美術史を批判的に研究。作風も大きく変化した。1983年の『天動説 五』含む16点のシリーズは、そうした研究活動を経て達成された絵画シリーズである。

作品リスト

記載は、題名（日英）、制作年、材質技法（日英）、サイズ（縦×横、または高×幅×奥行cm）、当館分類番号または所蔵先、の順である。

・都合により展示作品を変更することがあります。

野見山暁治 NOMIYAMA Gyoji

1 人間

Figure
1961
油彩・画布
oil on canvas
145.6×97.2
1-A-486

2 モレア

Moorea
1974
油彩・画布
oil on canvas
130.0×195.0
1-A-178

3 空

Vault
1983
油彩・画布
oil on canvas
195.5×245.1
西日本シティ銀行蔵
(寄託)

4 説話

A Narrative
1993
油彩・画布
oil on canvas
182.0×225.5
西日本シティ銀行蔵
(寄託)

豊福知徳 TOYOFUKU Tomonori

1 立像

Standing Figure
1959
鉛筆・紙
pencil on paper
54.2×76.8
1-D-100

2 立像

Standing Figure
1959
コンテ・紙
conte on paper
76.7×54.2
1-D-101

3 立像

Standing Figure
1959
鉛筆・紙
pencil on paper
38.9×27.6
1-D-102

4 漂流 '60 II

Drifting '60 II
1960
木
wood
174.5×293.0×66.0
西日本シティ銀行蔵
(寄託)

5 空 II

Sky II / CAELUM II
1965
木、塗料
wood, paints
201.5×311.0×10.0
1-G-5

6 「漂流」のためのエスキース

Study for "Drifting"
1976
鉛筆・紙
pencil on paper
69.6×52.1
1-D-110

菊畠茂久馬 KIKUHATA Mokuma

1 葬送曲 No.2

Funeral March No.2
1960
アスファルト、ペンキ、陶器、段ボール・板
asphalt, paint, pottery and corrugated cardboard on board
136.6×182.0
1-A-495

2 ルーレット

Roulette
1964
金属、ヘルメット、塗料、鉛筆・板
metal, helmet, paint and pencil on board
106.2×42.5×14.0
1-A-618

3 天動説 五

Ptolemaic Theory V
1983
油彩、蜜蠟、木、布・画布
oil, encaustic, wood and cloth on canvas
259.3×194.6
1-A-261

4 天河 二

Heavenly River II
1996 (加筆1998以降
retouched after 1998)
油彩、蜜蠟・画布
oil and encaustic on canvas
259.2×388.6
1-A-630

野見山暁治 略歴

作成にあたり、『ユリイカ 8月臨時増刊号 総特集・野見山暁治 絵とことば』(2012)掲載の年譜等を参照した。

| | |
|------|--|
| 1920 | 福岡県穂波村（現・飯塚市）に生まれる。四男三女の長男。幼少期より絵画に興味を示す。 |
| 1938 | 上京し、画家・斧山萬次郎宅に寄寓。東京美術学校教授・小林萬吾主宰の私塾に通う。福岡県嘉穂中学校卒業。東京美術学校予科に入学。東京美術学校本科進学。南薰造教室に入る。 |
| 1939 | 「第20回春陽会展」に初入選。 |
| 1942 | 9月、戦争のため東京美術学校を繰り上げ卒業。現役兵として従軍、満州に派遣。まもなく肋膜に水があり、翌年内地送還。 |
| 1943 | 傷痍軍人福岡療養所で終戦を迎える。 |
| 1945 | 独立美術協会の今西中通と出会い、作品の批評を受ける。 |
| 1946 | 上京。「第12回自由美術家協会展」で自由美術家協会賞受賞、会員推舉。福岡市在住の内藤陽子と結婚。東京・世田谷に住む。 |
| 1948 | 詩人・瀧口修造による選考で個展開催（タケミヤ画廊、東京）。フランス政府私費留学生として渡仏。 |
| 1955 | 陽子夫人渡仏、ともにパリで暮らすも、夫人は翌年がんで死去（29歳）。 |
| 1958 | 「滞欧作品による野見山暁治個展」（ブリヂストン美術館講堂）。「第2回安井賞候補新人展」（国立近代美術館、東京）で第2回安井賞受賞。 |
| 1964 | 東洋画への憧れを強くし、日本に帰国。東京・世田谷の田中小実昌・淑子夫婦宅に同居。淑子は野見山の妹。自由美術家協会を退会。 |
| 1965 | 「現代美術の動向 絵画と彫塑展」（国立近代美術館京都分館）に出品。 |
| 1968 | 東京藝術大学助教授となる（72年教授。81年退任。88年まで客員教授）。 |
| 1971 | 福岡市の武富京子と結婚。東京・練馬に新居を建てる。福岡相互銀行（現・西日本シティ銀行）本店応接室の装飾を完成。 |
| 1976 | 福岡県志摩町に新居を建てる。単行本「祈りの画集」のため、宗左近らと東京美術学校出身の戦没画学生の遺族を回り取材。 |
| 1978 | エッセイ集『四百字のデッサン』（河出書房新社）刊行。第26回日本エッセイスト・クラブ賞受賞。 |
| 1979 | 『アジア現代美術展』（福岡市美術館）に出品。 |
| 1983 | 福岡相互銀行本店エントランスホールのモザイク壁画完成（原画は『穹』）。初の回顧展「野見山暁治展」（北九州市立美術館）。 |
| 1992 | 第42回芸術選奨文部大臣賞受賞。 |
| 1994 | 第1回福岡県文化賞受賞。 |
| 1996 | 個展「野見山暁治展—その、動く気配の一瞬の形を」（練馬区立美術館）開催。第38回毎日芸術賞受賞。 |
| 2000 | 文化功労者に選ばれる。 |
| 2003 | 回顧展「野見山暁治展」（東京国立近代美術館他3会場巡回）。 |
| 2005 | 戦没画学生慰霊美術館「無言館」で菊池寛賞受賞。 |
| 2008 | 東京メトロ明治神宮前駅にステンドグラス壁画《いつかは会える》完成。 |
| 2011 | JR博多駅にステンドグラス壁画《海の向こうから》完成。個展「野見山暁治展」（石橋美術館、久留米市／ブリヂストン美術館、東京）。 |
| 2013 | 福岡空港国際線ターミナルビル3階にステンドグラス壁画《そらの港》完成。 |
| 2014 | 文化勳章受章。 |
| 2021 | 「100歳記念すごいぞ！野見山暁治のいま」（高島屋日本橋店本館6階美術画廊、東京、他） |